花や人影

式場俊三

牧羊社

著者略歴

式場（しきば）　俊三（しゅんぞう）

明治45年生

昭和10年『文学界』編集部へ

昭和19年『文学界』とともに文芸春秋社へ

昭和23年　永井龍男、香西昇らと日比谷出版をはじめる

昭和27年頃より　バラいじりに凝る

昭和31年より　山下清にかかわる

式場病院理事

花や人影

昭和五十七年六月十五日　発行

著　者　式場俊三

発行人　川島壽美子

発行所　牧羊社

東京都渋谷区渋谷二丁目十二の十二

電話　〇三(四〇〇)一六一四

振替　東京　九―九〇二〇二

印刷　三和印刷株式会社

製本　松栄堂製本所

定価一、八〇〇円

0095―10143―7760

花や人影・目次

花や 7
バラを焚く 9
スクランブル 13
木のぼり枝おろし 17
花の宴 21
散りぎわ 26
花客往来 30
鯉を踏む 34
咲くや咲かずや 38
虫愛づる児 42
四年目の金魚 46
葡萄記 51
誰がために薫る 55

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

人や 61
あくび 63
堅気ということ 68
『文学界』出張校正室 73
丸子の宿 81
ゴッホと兄と 86
羽衣火事 92
春秋庵始末 98
入歯有情 104
また、花など 111
ある石庭 113
霜痛み 118
鯉師など 122

斑花暮色 129
ザイフリボク 137
散るよろこび 147
バラの素顔 153
山の湯の魚 159
清残影 167
生涯 169
放浪以後 189
拙いということ 203
放浪について 207

花や人影

装幀・川島羊三

花や

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

バラを焚く

それまでは、園芸などというものにはほとんど無縁だった男が、あるときバラ園につれていかれ、どうしたことか、これまでやってきたことの全部とこの花とをとりかえてもいいような気持ちになって以来、バラいじりを二十五年以上もつづける羽目になってしまった。素人がなにかに凝りだすと、べつに世のため、ひとのためといった合理性や計算がないばっかりに、歯止めがきかなくなる。さして広くもない庭に、足の踏み場もないほどにバラを植えこんで、一番多いときは三千株を越していたようだ。

これがプロの園芸家になれば、品種改良とか、銘品の普及とかという、れっきとした役割を持っているために、そんな羽目をはずしたりはしない。ことに西洋バラなどという代物は、流通機構の発達した当世では、世界を股にかけた園芸品で、花のよしあしの品定めにも、なかなかきびしい枠ができている。なにがしという名のバラには、ちゃんときめられた花色、花型、花のサイズがあって、その名のバラがいかにほれぼれと咲こうが、この

標準にあっていなければ落第である。

多分こんなことをきめたのはイギリス人だろう。あの国に「バラはバラだからバラなんだ」という意味のことわざがある。「人でなし」の人格は認めないということなんだろうが、完全主義もほどほどにしてもらわないと、アマチュアには褊狭にみえてくる。そんなへそ曲りの気持ちも手伝って、なんでもあります式のスーパーまがいのバラ苑をでっちあげ、咲く花すべてよしと合点したわけである。

だが、よくしたもので、度の過ぎた淫しかたは、バラ自身から反撥をくう。植物には二つの型があるらしく、スギやヒノキのように肩を接して共育ちをするものと、バラのようにあまり密植すると共倒れになるものがあって、こっちの方がどうも根性まがりにできているらしい。これは仕方のないことかもしれない。バビロンの空中庭園にバラ花壇の遺構がうかがえることでもわかるように、この花は数千年前から人間にちやほやされつづけているうちに、すっかり野性味を失って、ひどく「ひとくさく」なってしまったのである。となりあったバラの一方がちょっと調子をくずすと、片方がこれみよがしにいい花をつけるのと逆比例して、まるでコンプレックスがでてきたかのように、すっかりちぢまってしまう。

どうも人間が生物をいじりすぎると、妙な結果のでることが多いのではなかろうか。い

まはやりの錦鯉などにしても、いわゆる駄鯉の群が嬉々としてたわむれながら、えさのとりっこなどやっているとき、色鮮やかに、姿うるわしい銘鯉がただ一尾、ぽつんと群からはなれて、えさなどに目もくれない様子をみていると、孤高の美しさなどより本性を失った哀しさの印象の方がつよい。品種改良などということも、所詮はほかの生物に人間の業(ごう)を押しつけることにつきるのかもしれない。

ハト・レースが物議をかもした。伝書バトに無理な距離をとばして、大部分のハトが斃死するか行方不明になった時のことである。動物愛護家が無残だといって非難すれば、一方は帰巣本能のギリギリを求める品種改良では、已むを得ぬ淘汰だという。生きたままのスッポンを熱湯になげこんで、二秒間も死の苦痛をあじわわせたということで日本人の調理人を罰した英国でも、馬や犬の改良では、出来そこないを淘汰することを義務づけている。無理な交配をして不完全なものを生んだご当人たちが、これを化物あつかいして殺戮するのは残酷ではないのか。バラの新種作りにしてもそうである。数千数万の実生から可能性を秘めていると思われる数本を選別し、他は惜し気もなく捨ててしまう。バラマニヤには、動物を殺すと同じように胸の痛む想いなのに。

そして私も、この二十数年、毎冬胸の痛む想いから新年度のバラ園作りをスタートしているわけである。月刊や季刊の雑誌作りが、その号の発行月の季節を心に浮かべながら、

数か月前から編集プランを立てるように、五月に花咲くバラ花壇も、真冬にはじまる。寒肥も消毒も剪定も、みんな冬の仕事だが、一番の心労は株の差替えである。だんだんわかってきたことだが、西洋バラの習性は一アマチュアの我意などゆるさないほど固まっている。こっちがルールをはずせば、そこだけがおかしな工合になる。冬毎にバラにたしなめられながら手直ししているわけで、まずコンプレックスを持ったバラは抜かなければならない。これは仕方のないことで、一度いじけてしまったバラは、他に移しかえていかに手当てしてやっても、ほとんどよくならない。これはバラにも半分責任があるような想いもあって、いくぶんの気楽さはあるのだが、困るのは出来すぎのバラである。スクリーンやアーチに仕立てるつるバラは別として、バラ花壇は眼下にながめるようにできている。それが背丈より高く育っては、花は空を流れる雲にでもまかせ、こっちは居丈高なトゲでも観賞するしかないことになる。

これはバラのせいだけではなく、篤農風の日本式栽培法にもよるのだが、とにかく育ちすぎのバラにいい花は咲かない。ごめんよとあやまりながら抜いてしまわなければならない。このようにしてどれほどのバラを殺してしまったことか。わずかに心のなぐさむのは、園芸バラの最盛期は五、六年生までで、あとは老残の道をたどるのが普通であって、以後の花には老妓に芸を強いるような無残さがともなう。

冬空の下、抜いたバラの山に火を放つ。すでに花芽を身につけながら、音をたてて燃えあがっていくバラの炎に、鎮魂の祈りをささげるのが、毎年変わらぬ私のバラ始めなのだ。

（昭和五十四年）

スクランブル

築地で用をすませ、冬空の下を、銀座にむかって肩をすくめて歩いていたら、歌舞伎座のところで、昼の部のハネにぶっつかった。七三ぐらいの割で女の人の多い行列が長々とつづいていて、とても追いぬけそうにないと思ったので、この流れに身をまかせることにした。かなりゆっくりした歩調で、口数もすくなく、いまだに劇の余韻を反芻している風情なんだが、気になりだしてみると、どうにも手強い情緒のかたまりみたいなものに包みこまれてしまった感じだ。これまでの数時間、同じ夢をみてきた人たちの間にある暗黙の連帯感が、シュプレヒコールを連呼するデモ隊などより、言葉がないだけに余分に強く、こちら側の無力感をさそう。

アカマツやヤブツバキの純生林に行きあたると、その植物特有の妙な気配につつまれてしまうのだが、これは同じ生理に生きる彼らの仲間意識が作りだす小宇宙に踏みこんだせいで、専門家はこれを微気流という。混生林などにはみられない強力なバリアで、このなかで、かなり密生しながらのびのびと育つ。ここにうっかり林道などを切り開いたりすると、バランスをくずして、道のそばから枯れていくという。

こんなことを考えているのは自分ひとりだと思うと、へんにしらじらしくなって困っていたが、数寄屋橋の交差点へきて、この集団の動きが止まってしまった。ここは近年はじめられたスクランブルという方式で、左右、斜めと、どちらへも渡れるかわりに、かなり待たされる。歩行者信号が青に変わると同時に、人の群が一斉に動きだしたが、ここで今まで一つ方向に進んでいた情緒のかたまりがいきなり崩れていく。右に左に、てんで勝手に動く人影にぶっつかりそうになりながら、私は、やっと芝居がおわったんだと思った。それぞれに違った想いを持ちだした人々が、きゅうにしらけた顔になって、人ごみをかきわけ、かきわけしているなかで、私はだんだん人恋しい気持ちがたかぶり、近くのビルの片隅で友人がやっている飲屋にいって、旧友たちの消息でも聞こうかなどと考えはじめていた。

スクランブルといえば、なにか「国籍不明の機影発見、各基地は一斉に緊急発進せよ」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c